



早川康式さんと社会主義

吉川 勇一

「日本反帝同盟」への参加

早川さんは、第二次世界大戦の以前、学生生活の時代から、社会主義の思想を支持、実践の行動に参加し、「日本反帝同盟」（正式には「反帝国主義・民族独立支持同盟日本支部」）を主要な舞台として活動していた。

この「反帝同盟」は、それ以前に存在していた「対支非干涉同盟」（山本宣治委員長）・「戦争反対同盟」を受け継いで一九二九年に結成されたものだった。一九二八〜二九年には、日本共産党に対するうち続く大弾圧があり、活動はほとんど非合法的な活動にとどまらざるをえなかった。

一九二九年（早川さんが大学に入った年）、パリで「国際反帝同盟」（帝国主義に反対し、民族独立を支持する国際同盟）が成立した。日本では、片山潜が創立から参加し、代表委員会の一人にもなっていた。国際反帝同盟の第二回世界大会は、二九年七月にドイツのフランクフルト・アム・マインで開かれたが、日本代表には、片山潜、国崎定洞、千田是也、堀江邑一、三宅鹿之助、平野義

太郎が参加している。そして一九二九年十一月七日、「反帝同盟日本支部」を結成することになる。

一九三三年、上海に「反戦大会」が開催されるが、日本もその方針に従い、パリ国際反戦委員会の日本支部として「日本反戦委員会」も結成され、それによって統一戦線の方針にもとづいて広汎な層を含めて合法的に活動する努力が始められた。こうして、平和主義のリーフレットの配布など、全国で活動が展開はされたが、すでにときに遅く、戦争情勢が進むにつれ、労働者階級、左翼組織から仏教徒の宗教団体まで反戦グループは弾圧され、撃破されて、大衆運動は一掃されることになってゆく。一九二八年から三〇年代初めには活動家は数万人の逮捕がされており、一方、社会民主主義グループは「産業報告会」に追随して、戦争動員体制に組織されてゆく。

早川さんが八高に入学した頃は、数学と物理ばかりやっている「模範生」で、「それ以外は倫理学を出発点として、人間は何を目的に生きていけばよいかということばかり考えて」いた学生だと書かれている（「反帝同盟の思い出」）が、帝大物理学科に入学（一九二九年一九歳）した翌三〇年に、先輩の友人で一高から物理に入っていた中島正氏（「哲学館」で文部省圧迫を受けた中島徳蔵さん。一九二九年頃は東洋大学学長——の次男）の勧めで「日本反帝同盟」に入った。早川さんは、その組織で非合法、パンフや機関紙の配布、ドイツ語の左翼文献の翻訳、労働者への組織などに活動したが、一九三一年（二〇歳）には、東京・四谷左門町での「反帝同盟」第一回全国大会（第一グループ）の会場で、特高警察によって全員が逮捕され、以後、早川さんの活動も不可能になってしまった。（二五〇ページに日本反帝同盟の機関紙「反帝新聞」第一号紙面掲載）

早川さんの「反帝同盟」についての評価

この「反帝同盟」に参加し、活動していた時期のことは、戦後になって早川さんはいろいろの記録を述べている。例えば、

——反帝同盟というのは植民地民族解放のための広汎な統一行動組織であった筈だが、戦争の危機の増大につれ、世界でも日本でも戦争反対の運動が重要になりそれに力を入れた。その場合、戦争の惨禍を宣伝し、戦争でもうけるのは誰かという暴露をやるし、反対運動の行動を組織すべきだという程度のことはずぐわかったが、いろいろわからないことが出て来た。文献をしらべようとしても反帝同盟の文献は少なく、勢いインプレコールなどコミンテルン関係の出版物を参考にせざるを得なかった。コミンテルン第六回大会は、戦争の危険を重大視して『戦争に反対する闘争』の決議をしているが、それを読むと反帝同盟としてはどうすればよいかということが却ってわかりにくくなった。コミンテルンは(i)戦争がおきるまではあくまで戦争に反対して闘い、戦争が起きたら内乱に転化するために闘う(ii)反戦闘争において、平和主義者に対する闘争は不可欠である。平和主義者には宗教的平和主義者、人道的平和主義者、社会主義的平和主義者、革命的平和主義者などがあり、これらすべて敵である。断固たたかうべきである。(iii)上からの統一戦線をつくってはいけない、統一戦線は下からでなくてはならない。……といていた。私は『平和主義』的なことをやってコミンテルンの方向を妨害してはならないと思い、一方余り尖鋭な方針では反帝同盟の存在意義がなくなるしいつも迷い続けていた——。(井上學『日本反帝同盟史研究』不二出版二〇〇八年 四五九〜四六〇ページ)

とある。

これは著者、井上氏の「聞き書き」によるとされているが、井上氏は、この著書で、「早川氏の『回想』から、「戦争の危機の増大につれ、世界でも日本でも戦争反対の運動が重要」になってきている時期に「反帝同盟としてはどうすればよいか」が真剣に模索された様子を知ることができる。しかもその「問い」が、当時のコミンテルンの反戦闘争路線との関係でより複雑になったことを窺うことができる。」と記している。

本書に何篇か採録された「反帝同盟」に関係する早川さんの文章では、スパイなど官憲による破壊行動のみではなく、当時の日本共産党、さらにはコミンテルンの指導者が「でたらめな」方針を与え、そのために意図的に警察に通報されて現場の日本共産党員や「反帝同盟」の活動家たちが逮捕されたり、あるいは組織の中で除名されたり、追放されたりして、混乱な状態に陥れたこと、かなり率直に指摘している。(例えば「反帝同盟元書記長津金常知氏が『わが青春に悔いあり』と告白していること」の背景)

ここは反帝同盟そのものを述べるところではない。これについては、例えば、次のような文献を検討させていただきたいと思う。

井上學『日本反帝同盟史研究』不二出版 二〇〇八年

田中真人『一九三〇年代日本共産党史論』三一書房、一九九四年(この本のうち、「第二章、日本

反帝同盟の研究 — 共産主義運動と平和運動」は、<http://www.2s.biglobe.jp/~mike/tanaka1930.htm>に全文転載されている。)

戦後のスターリン批判

早川さんは、戦後、つぎつぎと明らかにされてきたソ連、スターリン、あるいはコミンテルンなどについての著作や記録をすぐに読破した。そして、戦前、早川さんが日本で「反帝同盟」の活動に参加していた時期、自分たちがコミンテルンや日本共産党の方針の絶対的権威に盲信していたこと、スターリンの独善的個人崇拜主義や多数の同志への粛清などの誤りを知ること、特に戦前、広範な反戦的勢力への統一をせず、セクト的な方策を採り、統一戦線（人民戦線）を時期的に間に合わなくさせたことなどを理解する。

それゆえ、早川さんは、戦後の日本共産党に入党はするが、共産党がスターリンや毛沢東などへの信奉のときも、早川さんは批判的な姿勢を持ち続け、フルシチョフのスターリン批判や「六全協」などよりもずっと以前の早い時期から、党内の細胞会議などでは、スターリンや毛沢東の批判を率直に発言し続けた。

セクト主義を抑えた大衆運動

しかし、早川さんは、社会主義への支持は最後まで信念として持っていた。前衛政党の必要性も、一九七〇年ほどまでもっていたようで、日本共産党の方針や姿勢に強い批判は維持しながらも、党への批判を公的な発表は抑え、党中央との正面に対決することではなく、平和委員会や日本原水協などの大衆運動の中で、セクト的な方針を極力抑えて、幅の広い統一の運動が展開できるように努力

を続けた。とりわけ、「主要打撃の方針」については、戦後の運動の中でたびたび左右に揺れる誤りについては、一貫して批判を維持し、主張した。

日本共産党の『前衛』一九五四年二月号に、岡本健太郎「主要打撃をめぐる二つの問題」という文が掲載されているが、これは早川さんのペンネームである。これは、表面的にうっかり読んでみると、スターリンを支持し、「主要打撃論」を主張して右翼社民グループへの強い批判を述べているように受け取る可能性があるが、そうではない。党の機関誌であるために言葉を慎重に選びながら、その頃党内にあったアメリカのみが闘争の目的で、吉田内閣と日本独占は闘争の目標ではないとする方向への批判を指摘しようという文であったようだ。

早川さんは、運動の中の他のメンバーで、戦争中に協力していた人や、批判的意見を持っている人びとがあっても、早川さんは運動から特定の人を除外したり、疎外する姿勢はもたず、意見は交換しつとも一緒に仕事を進めた。

しかし、一九七〇年以後、原水協での混乱のあと、ついに日本共産党からも離反した。党内に残って中から誤りを是正することは不可能だと思ふようになったようだ。だが、最後まで、市民運動などで反戦活動に参加・支援を続けられた。（早川さんと反戦脱走米兵への支援）参照）

戦前の「反帝同盟」運動でのセクト主義、個人への排除についての経験は、戦後の社会主義運動、反戦運動の中では、太い線として早川さんの生き方、姿勢の中心にあったといえる。



發刊に際して

十一月七日、日本反帝同盟創立第一週年紀念日である。この日我々は、同盟の全閣員が一致して、この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。

十一月七日、日本反帝同盟創立第一週年紀念日である。この日我々は、同盟の全閣員が一致して、この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。

反帝同盟國際本部 書記局からの書翰

此手紙は同志のエンペーン山平に宛てられたものである。山平は、我が手紙の受取手である。山平は、我が手紙の受取手である。山平は、我が手紙の受取手である。

此手紙は同志のエンペーン山平に宛てられたものである。山平は、我が手紙の受取手である。山平は、我が手紙の受取手である。山平は、我が手紙の受取手である。

十一月七日をモデとキライトキで戦へ!!



この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。

この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。

この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。

この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。

この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。

この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。

この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。

この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。

この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。

この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。この日我々の活動の中心として、自らの解放を期す。